

Ф.И. チュツチェフ政治詩試訳(3)

大 矢 温
飯 島 由 大

はじめに

前回、前々回に続き、六巻本の全集をテキストにチュツチェフの政治詩の訳を試みる。

1) ナポレオン¹⁾

I

「革命」の息子よ、お前は身の毛もよだつ母と共に
果敢に戦^{いくさ}を始め — そして戦闘の中で疲れ果てた……
お前の専制の才能はそれに打ち勝たなかった！……
不可能な戦^{いくさ}、無駄な苦勞！……
お前はそのすべてを自らの中に担う……

II

二匹の悪魔^{デーモン}が彼に仕えていた、
二つの力が彼の中で不思議に融合した、
彼の頭の中には — 高く鷲が舞い、
彼の胸の中では — 蛇がトグロ巻く……
インスピレーションの幅広き翼の
大胆不敵な飛行は鷲のもの、

大胆不敵さのその中に
蛇のずる賢い計算がある。
しかし、理性では解し得ない
聖なる力は、
彼の心を照らし出さず、
彼に近づかなかった……
彼は現世の人で、神の炎ではない、
彼——波の軽蔑者——は威風堂々と航行した、
だが信仰の暗礁に当たり
檻樓船は木端微塵になった。

III

そしてお前は立った——お前の前にはロシアがある！
そして賢明なるヴォルフフよ²⁾、お前は合戦を予感して、
みずから致命的な言葉を口にした：
「その運命が決するように！……」³⁾
言霊は無駄ではなかった
運命はお前の声に反応した！……
しかし、流刑中に新たな謎かけによって⁴⁾
お前はこの宿命的な反応に反問した……

時は経ち——窮屈な流刑から
故郷に戻りし死者、
動乱の精神であるお前は、
最愛の川辺でついに眠りについた……
しかしその眠りは浅い——夜毎、憂鬱になり、
時にお前は起き、「東」を見る、
そして、夜明け前のそよ風を感じるや否や、

突然狼狽し、走り回るのだ。

1832年頃の詩を第二聯に、1848年頃の詩を第三聯にして、1850年3月頃に第一聯を付け加えて連作にまとめたもの⁵⁾。それぞれナポレオン・ボナパルトをテーマにしたものだが、聯相互の関連は薄い。この詩がまとめられる直前、チュツチェフは『ロシアと革命』(1848年4月)、『教皇とローマ問題』(1848年12月)、『ロシアと西欧』(1849年11月に着手)と、一連の政論に取り組んでいるので、この詩もそれらの政論と結びつけて解釈するべきである。

ロシアの存在意義を、それぞれ別の原理に突き動かされている東西ふたつのヨーロッパの対立という観点から立論するチュツチェフにとって、1812年の対ナポレオン戦争は、これら両者の対決であった。他方、この詩がまとめられた1850年のヨーロッパは革命的動乱のさなかにあった。ここでの東西ふたつのヨーロッパの対決とは、「ロシア」と「革命」との対決であった。この詩において「ロシア」対「ナポレオン」という過去は、「ロシア」対「革命」という現在に二重写しされているのである。

2) 無題⁶⁾

諸民族が荒れ狂いて既に3年目⁷⁾、
そして春——春来たらばその度に、
不安に満ち、激しく轟く雷鳴を前にした
野鳥の群れの中のごとく、喧噪と悲鳴あり。

沈痛な物思いにて公も、君主も
震えし手にて権力を握りおり、
理性は不吉な憂鬱に押しつぶされた；
人々の夢想の獐猛なこと、狂人の夢のごとし。

しかし「神」は我等と共にあり！…… 底から遊離するや、
朦朧となり、恐怖と闇で満たされた深層は、
我等めがけて突進した、――

しかし、それは御瞳を濁らさなかった！……
風が狂暴になった――しかし…… 「かくあるまじ！」――⁸⁾。(原文斜体)
と、汝は^{のたま}曰い、――そして波は後ろへ退いた。

1848年のオーストリアやプロシアにおける革命的動乱を念頭に置いた詩。1行目に「すでに3年目になる」とあるので逆算すると1850年の作ということになるが、より具体的に1850年3月前半の作と考える研究者もいる⁹⁾。チュツチェフはすでに1848年から1849年にかけて一連の政論に取り組んでいるので、この詩もそれら政論の内容と併せて読み解く必要がある。

革命によって動揺する「西」と不動の「東」の対比は、『海と懸崖』『無題（見よ、西が燃えさかる様を）』などでも繰り返されるテーマである¹⁰⁾。

3) 無題¹¹⁾

その時初めて、満座の祝典で、
スラヴ世界の^{むらがり}群の中で、
待望のしくみが確立する、――
それはポーランドとルーシが和睦するとき、――
しかもこの二者が、
ペテルブルクでも、モスクワででもなく、
キエフとツァーリグラードで和睦するとき……

1850年前半の作とされている¹²⁾。この詩においてチュツチェフは、ロシアからの分離独立を指向するポーランドに対して、スラヴの団結という立場からロ

シアとの「和睦」を呼びかけている。

チュツチェフにとってロシアは古代ローマ帝国の正当な後継者である。したがって、その首都はヴィザンチンからキエフ、そしてさらにモスクワからペテルブルクへと、時代を経るに従って変遷している。他方この詩において、古代ローマ帝国から現在に至る時間軸は、ヴィザンチンからペテルブルクに至る地理上の軌跡へと変換されている。つまり、「ペテルブルクでも、モスクワでもなく」「キエフとツァーリグラードで」とは、場所ではなくて時間に関する概念なのである。ここにモスクワ・ロシア以降に繰り広げられた両者のわだかまりの歴史を、モスクワ・ロシア以前に戻ることによって、時間軸を逆行することによって、精算したいと願うチュツチェフの歴史意識が横たわっているのを見ることができよう。

4) ネマン川¹³⁾

堂々たるネマン川よ、これはお前なのか？
私の前にあるのはお前の流れか？
お前は、いかなる名誉とともに、
ロシアの忠実なる番人として幾年月？……
ただ一度、神意によって、
お前は敵軍を通し入れた——
それによってお前はロシアの境界の十全を
永遠に確立したのだ……

ネマン川よ、お前は過去を覚えているか？
宿命の時のその日を、
彼が、お前の上に立った日を¹⁴⁾、
彼自身が、力強き南の悪魔が、だ——
そしてお前は、今のように、流れていた、

敵の橋の下でざわめきながら、
そして彼は、お前の流れをいとおしんだのか
その魅入られた瞳で？……

彼の軍隊は勝ち誇って進んだ、
旗は楽しそうにざわついた、
陽光を受けて銃剣は輝き、
橋は大砲の下で轟いた —
そして、高みから、あたかも、何かの神のように、
それらの上を彼は飛翔した
そして、全ての者を動かし、全てを
その魅入られた瞳で見守った……

唯一人、彼は見なかった……
彼、偉大なる軍師は見なかった
彼の方、対岸に
「もう一人」が — 立って…… 待っていたのを…… (原文大文字斜体)
そして軍勢が脇を通り過ぎた —
全ては厳しい戦^{いくさ}の形相……
そして逃れる事ができない「神の右手」は¹⁵⁾ (原文大文字)
彼らに己の刻印を押した……

それでも軍隊は勝ち誇って進んだ —
旗は誇らしげにはためいた、
銃剣の煌きが広がった、
そして、太鼓の音は満ち溢れ……
彼らの数は千万無量 —
だが、この果てしなき部隊の中、

いづくんぞ「10日」の日が¹⁶⁾
宿命の刻印を免れて過ぎようか……

1853年9月はじめの作とされている¹⁷⁾。1812年にナポレオンがロシア遠征を企てた際、彼はポーランドとロシアとの国境を流れるネマン川を渡ってロシアに侵入した。

1812年の対ナポレオン戦争という過去の出来事をテーマにしているが、これは迫り来るクリミア戦争と無縁ではない。チュッチェフにとってクリミア戦争は対ナポレオン戦争と同様に、東西の決戦であった。上述の「1) ナポレオン」と同様、この詩においても対ナポレオン戦争という歴史上の事件が現に進行中の出来事に二重写しにされている。

5) 無題¹⁸⁾

今お前は詩どころではない、
おお母なるロシアの言の葉よ！
作物は熟し、刈取り人の準備は整った、
天命の時がやって来た……

うそいつわ
嘘偽りは鋼の剣に受肉した；
神の遣わした何らかの天災によって
全世界ではなく、全地獄が
打倒すぞとお前を脅かす……

あらゆる流神的な理性が、
あらゆる不信心な民族が
闇の帝国が、奥底からそびえ立った
光と自由の名において！

彼らはお前に虜囚を用意した、
彼らはお前に恥辱を予言した、——
お前は——最良の未来の時の
言葉で、生活で、啓蒙だ！

おお、この厳しい試練の中で、
最後の決戦の中で、
お前は自分を裏切るな
神に己の正しさを証明せよ……

チュツチェフはスラヴの民族性について正教信仰とともに言語を重視していた。東西決戦の場とチュツチェフが位置づけていたクリミア戦争の文脈でこの詩を読み解くと、この詩から、言葉という共通項を持つスラヴ系諸民族の運命が存亡の危機にある、という彼の危機感を読みとることができよう。ロシア語の危機とは、その実、ロシア民族の、さらにはスラヴ民族の危機なのだ。

他方、この詩が書かれた1855年のはじめにツルゲーネフがチュツチェフの最初の詩集を出版しようと計画していたことから、この詩を、詩集の出版と国際情勢の緊迫化とを対比したものと読み解く研究者もいる¹⁹⁾。この詩集に検閲の許可が下りたのは5月30日だが、黒海沿岸のロシア軍はすでに4月から英仏連合軍との戦闘状態に入っていた。まさにチュツチェフにとってもロシアにとっても「詩どころではない」事態だったのだ。

6) 1855年の新年に²⁰⁾

我々は「運命の女神」²¹⁾の前に盲目的に立っている、(原文大文字)
我々はそのベールをはがすべきではない……
私はお前に自分のものを開かない、
しかし霊たちの預言の妄言は……

我々は目的までまだ遠い、
雷鳴は吠え、雷鳴は強くなる、——
そしてついに——鉄の揺籃の中、
雷鳴の中で「新年」は生まれる…… (原文大文字)

その特徴は身の毛もよだつほど厳しい、
血糊が手にも、額にも……
しかし戦の動乱^{いくさ}だけではない
それがこの世にもたらず物は！

それは単なる戦士ではなく、
「天罰」の執行者でもないだろう、——(原文大文字)
それは遅れ馳せたる復讐者として
久しく熟考された攻撃を行うだろう……

それは会戦と制裁のために送られた、
それは二つの刀を持つ：
1つは——血塗られた戦いの剣、
もう1つは——刑吏の斧だ。

しかし誰のために？……首は1つか、
命運尽きたるは全民族か？……
運命の言葉は明らかならず、
亡者の夢はおぼろげなり……

題名からも明らかなように、この詩は絶望的な戦況でクリミア戦争が推移する中で1855年を前にして書かれたものと考えられる²²⁾。チュッチェフにとっても新年は負け戦の継続と敗戦処理の年になることは明らかだった。

この詩の最初と最後の聯で「霊たちの預言」、「亡者の夢」など、スピリチズムの影響が認められる。チュッチェフとスピリチズムに関しては、1848年に近代スピリチズムがアメリカで発生した後、比較的早い時期からチュッチェフがこの西欧社会の新しい流行を取り入れていたことが知られている²³⁾。1853年には当時皇帝付き女官だった娘のアンナを訪問したチュッチェフは、冬宮殿内で降霊会を催して汎スラヴ主義的な空想をふくらましている²⁴⁾。とはいえ、この詩からも分かるように、クリミア戦争の敗北が決定的となったこの時期、降霊会で占う内容も「首は1つか」と、スラヴ民族の運命を問うものとなっている²⁵⁾。

7) オーストラリア皇太子殿下のニコライ一世の葬儀参列に際して²⁶⁾

いや、辛抱強さにも程がある、
 凶々しさにもまた程がある！……
 か
 彼の御霊に誓って言うが、
 全てを我慢できるわけではない！

そして至る所から響かずにおられようか
 1つの全般的な不満の悲鳴が：
 オーストリアのユダを立ち退かせよ
 か
 彼の墓標から！

彼らの裏切りの接吻と共に、
 彼ら使徒一族すべてを立ち退かせよ
 等しく汚名を烙印せよ：
 イスカリオット イスカリオット
 裏切り者、裏切り者！

1855年3月の作とされている²⁷⁾。ロシアの敗戦が決定的となる中で失意のうちに没したニコライ一世の葬儀に厚顔無恥にも出席したオーストリア皇太子に

対して、チュツchefは満腔の怒りを投げつけている。クリミア戦争に際してロシア外務省は、オーストリアの好意的中立を期待したが、それに反してオーストリアは英仏との連合の道を選んだ。チュツchefにとってもまた、1849年のウィーン動乱に際してロシアの援助を仰いだオーストリアの背信行為は予想外のことであった。チュツchefにとって一人オーストリア皇帝のみならず、葬儀に参列した皇太子もまた使徒ユダの「一族」であった。

8) 無題²⁸⁾

この寒村よ、
この貧相な自然よ —
辛抱が生まれた郷、
汝、ロシア民族の郷だ！

勝ち誇った異民族の視線は
捕らえていないし、気付いてもいない、
お前の質素な裸体の中に
何が秘かに瞬いているかを。

十字架の重荷を背負いてひしがれた、
故国よ、お前のすべてを、
「天帝は」奴隷の姿で (原文大文字)
祝福しつつ遍歴した。

1855年8月の作²⁹⁾。難攻不落を謳われたセヴァストーポリが陥落したのも1855年8月であるから、ほぼそれと同時に書かれたことになる。すでにクリミア戦争はオーストリアの「裏切り」もあって、ロシアの敗戦が決定的な状況だった。緒戦の勇ましい拡張主義的・汎スラヴ主義的な調子は影を潜め、チュツchef

フの視線は故国ロシアの寒村に向かう。ミュンヘンをはじめとする西欧での在外生活が長いチュツチェフにとって故国ロシアの村は「貧しく」その自然は「貧弱」だった。が、それにもかかわらず、チュツチェフはそのロシアの貧しさの中にキリスト教の真理を発見する。奴隷の姿で遍歴する天帝=救世主キリストの姿に謙譲と自己犠牲の精神を見るのだ。このようにチュツチェフは、ロシアの貧しさという否定的要素を価値転倒して、貧しいが故に神に近いのだ、と逆に高く評価するのだった。ドストエフスキーのみならず、チュツチェフにとってもロシア民族は神を孕む民なのである。

9) 無題³⁰⁾

醒めやらぬ人々の

この暗い群集の上で

お前はいつ登るのか、自由よ、

お前の黄金の光は輝くのか?……

お前の光線は輝き、そして活気を与える、

そして眠気も、霧も払う……

だが古い、膿んだ傷、

侮辱と暴力の傷跡は、

空虚さと精神の墮落は、

これらは理性を苦しめ、心の中で痛むのか、――

誰がそれらを治し、誰がおおうのか?……

それはお前だ、キリストの清らかなりーザよ³¹⁾……

1857年8月に領地のオフツークで民衆の祭りを見ながら書いた、とされている³²⁾。農奴制廃止を含む大規模な国内改革が準備される中で、チュツチェフは人

の利己心に基いて、人々の行動を外面的・機械的に規制する西欧流の法秩序に批判的だった。彼が目指したものは、ロシア人を内面からキリスト教の精神によって統合する有機的な社会だった。

10) 無題³³⁾

どこへ向かうか怪しいものだ
聖なるルーシよ、お前の生活の進歩は！
かつてお前は農民の小屋^{イズバ}だった —
今ではお前は奴隷小屋にされた。

この詩を創作した時期については諸説あるが、クリミア戦争の敗戦によって大規模な国内改革の必要性が論じられるようになった時期に書かれたことは間違いない。いわゆる「大改革」の過程でチュッチェフ自身、検閲制度の改革に尽力するが、その際も彼はロシアの特殊性を強調した議論を展開した³⁴⁾。この詩においても、農民の小屋「だった」ロシアが奴隷小屋に「された」、と人為による近代化に批判的である。

11) アレクサンドル二世に³⁵⁾

^{おんまえ}御前はお自分の日をお選びになった……久しき昔から印づけられた
偉大なる主の恩恵によって —
彼の方は奴隷の姿を人から剥ぎ取りて、
そして家族に返した — 小なき人々を³⁶⁾……

この詩は1861年2月19日に農奴解放令が発布された直後、61年3月に書かれた³⁷⁾。「ご自分の日をお選びになった」とは、アレクサンドル二世の即位が2月19日だったことにちなむ。この詩からチュッチェフが農奴解放令を歓迎して

いる様子が分かる。

11) 無題³⁸⁾

君が幼少よりロシアの音を理解していたのも伊達ではない
しかもそれらを生々とした共感によって自分の中で慈しんでいた —
今、学問の高みにおける、二つの世界にとっての
君は調停官である……

1861年にペテルブルクの科学アカデミーでヴァゼムスキーの文学活動50周年を記念して祝賀会が開かれた。その際、ドイツからウィルヘルム・ヴォリフソンというジャーナリストで劇作家が招待された³⁹⁾。彼はオデッサ出身のユダヤ人であったため、ロシア語にも堪能でプーシキン、レールモントフ、そしてチュッチェフの詩をドイツ語に訳していた。西ヨーロッパに属しながらも、ドイツに対しては比較的好意的な姿勢が読みとれる。

12) A.A. スヴォーロフ公爵閣下に⁴⁰⁾

かの勇猛果敢な御祖父の人道的な孫息子よ、
我々を許したまえ — 我等が人当たり良き公爵よ、
我々ロシア人が — ヨーロッパに無断で
我々がロシアの食人鬼⁴¹⁾を敬う事を……

いかにあなたにこの不作法の許しを請うべきか？
いかに正当化するのか
全てを、自分の使命にささげつつ
ロシアの十全を守り、救った者への賛同を —

全ての責任、全ての困難や重荷を
絶体絶命の戦いの中で負う者への——
そしてみじめな、苦悩に満ちた種族を、
復興して、自国へもたらした者への賛同を？……

彼は反逆者全てに標的として選ばれ、
静かに、立ち止まっていた、無傷で——
敵にとって生憎なことに、
ああ、一族の中の低俗者にとっても生憎なことに。

我々からの、友達からの彼への手紙が
我等にとっても恥ずべき証拠だとしても——
公爵よ、あなたの御祖父は
その手紙に自ら副署したに違いない。

この詩の宛名になっているペテルブルク県知事将軍の A.A. スヴォーロフはアルプス越えのスイス遠征で勇名を馳せた A.B. スヴォーロフの孫。この A.A. スヴォーロフ、1863 年のポーランド蜂起を鎮圧してロシアの軍政を施行した M.H. ムラヴィヨフ伯爵の名の日に友人たちが連署してお祝いを贈ろうとしたとき、署名を拒んだと言われている。1863 年 11 月のことである⁴²⁾。孫スヴォーロフに対するチュツチェフの非難から、武力によるポーランド鎮圧を正当化するチュツチェフの強い姿勢を見ることができる。

13) 1864 年 2 月 19 日⁴³⁾

静かな最後の^{あゆみ}歩で
彼は窓に近づいた。日は、傾き
澄んだ、神の恩恵のような光となって

西の方で輝き、燃えていた。
そして彼は復活の日を思い出した
偉大な日を、新約の日を――

彼の顔には感動のあまり
突然、死の影が晴れた。

胸に秘めた二つのいとしい姿がある
それらを彼は心の中に聖物のようにたずさえる――
彼の前に現れた――皇帝とロシア、
そして彼は心からそれらを祝福した。
その後、彼は頭を枕に押し付けた：
最後の戦いが行われた、
そして「救世主」は自ら愛をもって（原文大文字）
従順で忠実な神の僕^{しもべ}を解放した。

題名の通り、1864年2月19日に、親しく交際していた D.H. ブルードフの臨終に際して書かれたもの⁴⁴⁾。ブルードフは、カラムジン、ジュコフスキーらとともに文学サークル「アルザマス」のメンバーだった。

魂の不滅と復活という新約の教義を信じる、老いた反動的政府高官の死を、チュツチェフはキリストの愛によって「解放された」と多分にローマン的に、甘美に詠い上げる。ブルードフにとって「聖物」であった「皇帝とロシア」の二者は、チュツチェフにとっても「聖物」であったに違いない。この詩においても、西に傾く夕日は終末のシンボルとして機能している。

14) ENCYCLICA⁴⁵⁾

そんな日があった――主の正義の槌が

旧約の教会を破壊し、粉碎し、
司祭長は自らの剣で己を刺し殺し、
その中で息絶えた。

より恐ろしいものとして、より厳しいものとして
しかも現代に —「神」の裁きの日に— (原文大文字)
変節のローマで
キリストの偽代官に罰が下る。

数百年が経ち、彼には多くの許しが請われた、
まがった宗派 — いまわしい事件 —
しかし、「神」の正義によって許されなかったのは (原文大文字)
彼の最後の悪罵である……

彼はこの世の剣では死なない、
何百年もこの世の剣を支配している彼は、—
宿命的な言葉が彼を破滅させる：
「良心の自由はたわごとだ！」 (原文斜体)

1864年12月に、その前月、11月に発せられた、良心の自由を「今世紀の謬見」とするローマ教皇ピウス九世の回状に対して書かれたもの⁴⁶⁾。世俗の権力を使って信仰を、それもカトリックの信仰を、強要しようとする教皇に対してチュッチェフは、「変節のローマで、キリストの偽代官に対して罰が下る」と厳しい批判を浴びせる。

15) 無題⁴⁷⁾

「東」は疑わしげに沈黙する、(原文大文字)

至る所に深い静寂が……
これは何だ？ 夢か期待か、
昼は近いか遠いのか？
山頂がわずかに白んでいる、
森や谷はまだ霧の中だ、
町は眠り、村はまどろんでいる、
しかし空に眼差しを向けよ……

見よ：帯が見える、
そして、まるで秘められた激情のように赤くなりながら、
それはさらに明るく、さらに生き生きして——
それ全体が明るく輝きだした——
次の瞬間——全ての無限のエーテルの中で
勝利の太陽光線の
全世界的な^{かいん}嘉音の音が響く。

1865年7月の作⁴⁸⁾。すでに見てきたように、チュツチェフにとって夜はイスラム教徒の支配のシンボルであった。ここから夜明けを異民族からのスラヴ民族の解放と解釈することもできる。いうまでもなく、「東」=ロシアはその解放の先駆けである。ところがチュツチェフはこの詩を、「「東」は疑わしげに沈黙する」と始める。スラヴ民族が夜の闇の中でまどろんでいる一方、「東」の大国ロシアは「疑わしげに沈黙」している、というのだ。

ここでチュツチェフは、民族独立運動が盛んになる一方で、ロシア政府は打つべき手を打っていない、と断じているのである。チュツチェフの拡張主義はクリミア戦争を期に一時後退するが、ここでふたたび、汎スラヴ主義的な彼の拡張主義を見ることができる。「東」の影響は太陽光線となり、嘉音の音となって全世界に広がるのだ。

注

- 1) “Наполеон”, Ф. И. Тютчев, *Полное собрание сочинений и письма в шести томах*, М., 2002 — (далее Тютчев), т. 1, с. 219–210.
- 2) веший волхв: スラヴの予知能力があるとされる魔法使い。1849年頃からスピリチズムに傾倒していったチュツチェフは、超自然的な力によって未来を予知することができるかと信じていた。
- 3) 1812年6月22日にナポレオンがネマン川を渡るときに言った言葉とされている。
- 4) アクサーコフの解説によれば、チュツチェフの言う「謎かけ」とは、セント・ヘレナ島に流されたナポレオンが「50年後にヨーロッパは革命的なものになるか、あるいはコサック化された、つまりロシアの手に落ちたものになるだろう」と預言したことを示す。Аксаков, И. С., *Биография Федора Ивановича Тютчева*, М., 1886, с. 223. セント・ヘレナでナポレオンは、チュツチェフとは別の方面から「ロシアと革命」と言う問題を提起したことになる。
- 5) См., “Комментария”, Тютчев, т. 1, с. 510–512.
- 6) “*** (Уж третий год...)”, Тютчев, т. 2, с. 15.
- 7) 原文では языки だが、народы とする異本もあるので、ここでは「諸民族」と訳した。
- 8) 革命運動に対するニコライ一世による、1848年3月の勅語の中の言葉とされている。См., Брандт, Р. Ф., *Материалы для исследования «Федор Иванович Тютчев и его поэзия»*, СПб., 1912, с. 48.
- 9) См., Пигарев, К. В., *Лирика*, М., 1965., т. 2, с. 361.
- 10) “*** (Смотри, как запад разгорелся...)”, Тютчев, т. 1, с. 181: “Море и утес”, там же, с. 197–198.
- 11) “*** (Тогда лишь в полном торжестве...)”, там же, т. 2, с. 17.

- 12) См., “Комментария”, *там же*, с. 350. なお、「スラヴ世界」については43年のハンカ宛ての手紙の中でも言及されている。См., “Письмо к Ганке от 16 апреля 1843 г.”, *там же*, т. 4, с. 228.
- 13) “Неман”, *там же*, с. 60-61.
- 14) ナポレオン・ボナパルトのこと。
- 15) Десница：一般に右手を意味する単語だが、大文字で書かれていることと前後の文脈から「神の右手」と訳語を当てた。
- 16) 1812年12月10日にナポレオン軍は再びネマン川を渡ってロシア国外に敗走した。
- 17) См., “Комментария”, *там же*, с. 397.
- 18) “*** (Теперь тебе не до стихов...)”, *там же*, с. 66.
- 19) См., “Комментария”, *там же*, с. 404.
- 20) “На новый 1855 год”, *там же*, с. 67.
- 21) Судьба：大文字で書かれていることから、女神のことと解釈した。
- 22) См., “Комментария”, *там же*, с. 405-409.
- 23) 1849年から1850年の詩「ロシアの地理」にスピリチズムの影響を指摘することができる。また、近代スピリチズムに関しては、大矢「近代スピリチズムとロシア — アレクサンドル二世の「ゴックリさん」 —」、札幌大学外国学部紀要『文化と言語』第57号、2002年10月参照。
- 24) См. Тютчева, А. Ф., *Воспоминания*, М., «Захаров», 2000, с. 74-75.
- 25) クリミア戦争前のチュッチェフとスピリチズムについては、大矢「チュッチェフと1867年スラヴ会議」、『ロシア思想史研究』1号、成文社、2004年、98ページ参照。
- 26) “По случаю приезда австрийского эрцгерцога на похороны Императора Николая”, *там же*, с. 68.
- 27) См., “Комментария”, *там же*, с. 409.
- 28) “*** (Эти бедные селенья...)”, *там же*, с. 71.
- 29) См., “Комментария”, *там же*, с. 413-414.

- 30) “*** (Над этой темной толпой...)”, *там же*, с. 83.
- 31) риза : イコンを飾る金属製の枠のこと。
- 32) См., “Комментария”, *там же*, с. 434.
- 33) “*** (Куда сомнителен мне твой...)”, *там же*, с. 99.
- 34) 検閲改革とЧyтчeфについては、大矢「Ф.И. Чyтчeфと検閲改革」、北海道大学スラブ研究センター『スラブ研究』、1994年、第41号参照。
- 35) “Александрю второму”, *там же*, с. 108.
- 36) меньшая братья : 一般的には社会的に比較的地位の低い人々をさすが、ここでは「解放」された農奴のことを指す。
- 37) См., “Комментария”, *там же*, с. 464-466.
- 38) “*** (Недаром русские ...)”, *там же*, с. 110.
- 39) См., “Комментария”, *там же*, с. 467.
- 40) “Его светлости князю А. А. Суворову”, *там же*, с. 122.
- 41) людоед : 一般には「人喰い」、「極悪非道」の意味なので「食人鬼」という訳語を当てた。
- 42) 孫スヴォーロフのムラヴィヨフに対する言葉と伝えられている。これについては、署名を拒む際に「ムラヴィヨフのような食人鬼に」と孫スヴォーロフが言ったことを同席したニキテンコが日記に記している。彼もまた、孫スヴォーロフを「もっとも人道的な県知事将軍」と呼び、「人道的な介入で反乱を抑えられたらどうか」「なんとあなたは愚かなことか」と非難している。Никитенко, А. В., *Дневник*, от 16 ноября 1863 г., М., 1955, т. 2, с. 377.
- 43) “19-ое февраля 1864”, *Тютчев*, т. 2, с. 126.
- 44) См., “Комментария”, *там же*, с. 486-487.
- 45) “Encyclica”, *там же*, с. 132. この回状に関してアクサーコフは、1865年11月8日付けの『日』の巻頭論文で言及している。彼は、ローマ法王ピウス九世が免罪符の販売を始めると共に、良心の自由、信仰の自由、思想の自由、言論の自由などを syllabus という名のリストにして「悪しき無分

別にして危険なたわ言」として禁止する旨、回状を発し、その結果、フランスの世俗権力との対立を招いたことを伝え、ここに西欧文明の危機を指摘している。Аксаков, И. С., *Сочинения*, СПб, 1903, т. 4, с. 243-252.

46) См., “Комментария”, *Тютчев*, т. 2, с. 467.

47) “*** (Молчит сомнительно Восток...)”, *там же*, с. 148.

48) См., “Комментария”, *там же*, с. 514-516.